

早期教育を受けた発達障害児の発達経過

—T市幼児こたばの教室における早期教育Ⅲ—

菅野 敦 上林 宏文
(筑波大学 大学院)

1. はじめに

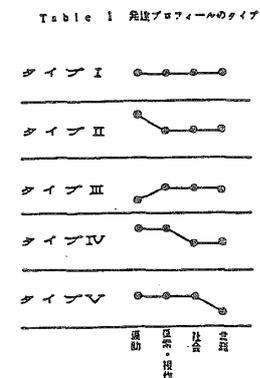
我々は、「こたばの遅れ」や「友だちと遊べない」など発達上の問題を主訴として相談や指導に訪れた乳幼児に関して、行動にあらわれた状態像を客観的なものとし、それにもとづいて発達におけるつまづきをあきらかにし、その指導の手がかりを得るこころみを経てきた。

第39回大会では、発達検査の下位項目による発達プロフィールにより対象児の類型化を行い、各タイプに分類された対象児の指導経過を通して彼らの発達について検討した。その結果、各タイプは、彼らの状態像を特徴的にあらわす診断カテゴリーと対応する部分が多く、さらにこのタイプは発達の領域を反映していることから、その後、対象児の指導の方針をたてる上で重要な資料となることが示唆された。

そこで、本研究では、各タイプに類型化された対象児の発達の経過を加齢にともなう発達指数(DQ)の変化を通して明らかにし、今後各タイプ別の指導法を検討するための基礎データとした。

2. 方法

①発達プロフィールによる類型化：類型化は、第39回大会で報告したように、インタビュー時の発達検査の発達プロフィールにより行った。発達検査は、津守式乳幼児発達検査法を用い、運動、探索・操作、社会、言語の4領域の発達プロフィールにより、以下の5タイプを設定した(Table 1)。



※ここでの領域間の発達差は
発達年齢、0~12月では 2ヵ月以上
1~3歳では 6ヵ月以上
3~7歳では 12ヵ月以上

②対象児：対象児は、幼児こたばの教室に來所し、2年以上の継続指導を受けた乳幼児である。彼らをインタビュー時の発達プロフィールにより類型

化し、その後のDQの変化をみた。今回は、タイプI(領域間の発達差がほとんどないタイプ)、タイプII(運動領域が他の領域に比べて高いタイプ)、タイプIV(運動および探索・操作の領域が社会、言語領域に比

べて高いタイプ)の3タイプの各6名、9名、4名を対象児とした。

3. 結果と考察

各タイプの平均DQの変化をFig.1に示す。図より、

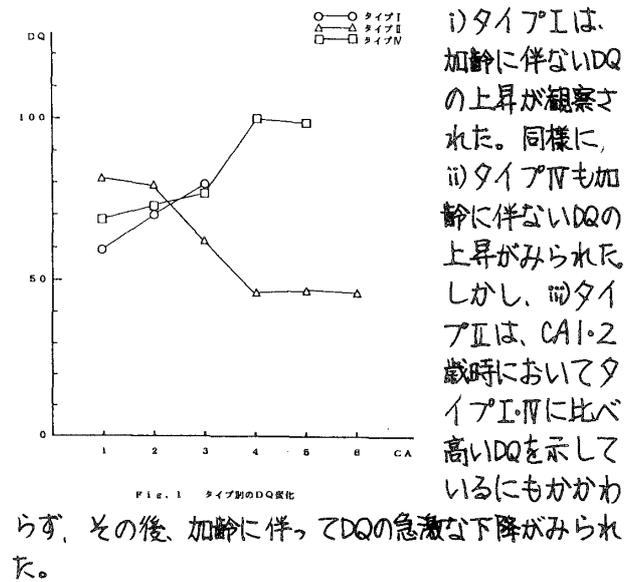


Fig. 1 タイプ別のDQ変化

ここで、DQの上昇がみられたタイプI・IVと、下降を示したタイプIIとを比較検討する。Table 1 からタイプIIは、他の2タイプと違い探索・操作が相対的に低下しているタイプとして特徴づけられる。従って加齢に伴うDQの上昇にとって探索・操作がひとつの要因となっていることが予測される。

そこで、さらに詳しく各タイプに分類された対象児の加齢に伴うDQの変化についてみってみる(Fig. 2,

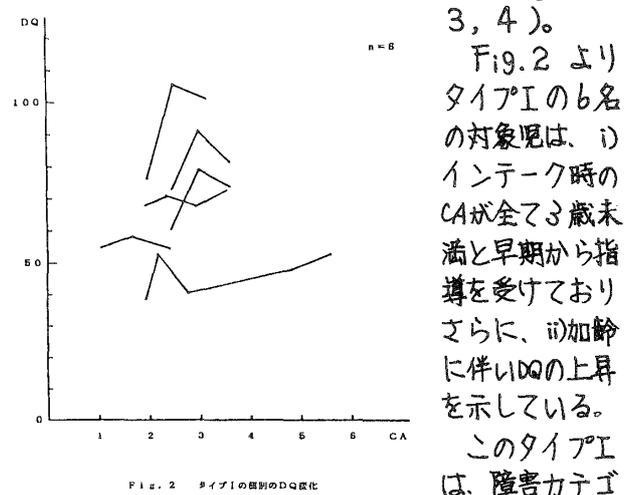


Fig. 2 タイプ別の個別のDQ変化

3, 4)。Fig. 2 よりタイプIの6名を対象児は、①インタビュー時のCAが全て3歳未満と早期から指導を受けておりさらに、②加齢に伴いDQの上昇を示している。このタイプIは、障害カテ

りからみると、ことばの遅れや発達遅滞と診断された者が多い。図において急激なDQの上昇を示した3名は、ことばの遅れと診断されており、一方なだらかな上昇を示した3名は、発達遅滞であった。今後、タイプIに関しては急激なDQ上昇のあとCAS歳時でおこる停滞傾向の要因は何か、また、なだらかな上昇を示す者は各年齢段階でいかなる課題につまずいているのか明らかにしていく必要がある。

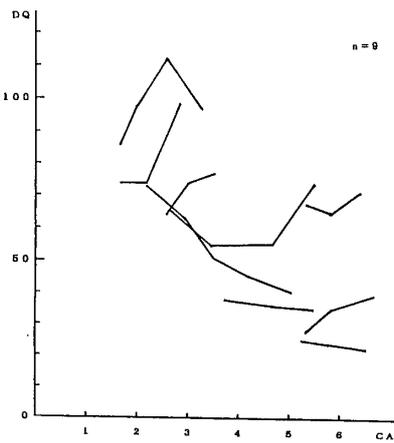


Fig. 3 タイプIIの個別のDQ変化

Fig. 3より、タイプIIの9名の対象児は、i)加齢に伴ないDQの上昇を示す者と、下降を示す者の2群にわかれることが観察された。ii)上昇を示した者は、インテーク年齢が3歳未満と早期より指導を受けて

おり、また、その際のDQも60以上と比較的高い。一方iii)下降を示した者は、インテーク年齢が4歳以上で、さらにその際のDQも40以下と低いことが観察される。

このタイプIIを状態像から考えると、多動で一見運動能力には問題がみられず他の領域の著しい遅れが観察される。また、母親や指導者との関係がとりにくく日常生活や指導場面で、特に、様々な困難をきたすことが多い。従って、このこと、上昇を示した群と、下降を示した群について、今後、指導経過を通した比較検討を行う必要がある。

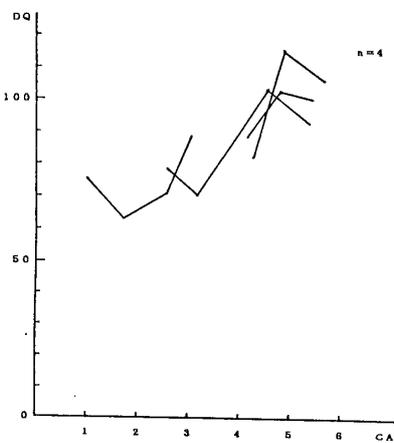


Fig. 4 タイプIVの個別のDQ変化

Fig. 4より、タイプIVの4名の対象児は、i)インテーク時のDQが全て70以上と高く、さらに、ii)彼らは、加齢に伴ってDQの上昇を示した。

このタイプIVを状態像から考えると、タイプII同様、動きが

激しく、人との関係がとりにくい。しかし、タイプII

と異なり、知的な操作能力に優れたところがあり、物の操作を媒介とかかわり遊びが可能なタイプであった。今後、タイプIIとの比較検討を行っていくことで、探索・操作能力が発達にはたす役割りが明らかになるものと考えられる。

4. まとめ

本報告は、早期教育の対象となる乳幼児について、個々の子どもに応じた指導法を適格に判断し、実施するための基盤をつくることの一環として、発達上の問題をもつ子どもたちが示す領域間の発達のずれと、その後の発達について明らかにしようとした。

ここでは、各タイプの対象児のDQの変化より、①探作・操作能力がその後の発達に重要な要因となっていると考えられた。さらに、②3歳以前の早期より教育を受けた場合、領域間の発達のずれは、その後の全般的な発達を考える上で必ずしも十分な指標とはならないことが明らかになった。

そこで今後、1)各タイプに個々の課題のつまずきはあるか、2)どのような指導により、それらのつまずきを改善していきけるか、さらに3)インテーク時のタイプを、その後どのように変化させて発達していくのか、などさらに明らかにしていく必要がある。

<文献>

- 津守真, 稲毛教子 : 乳幼児精神発達診断法 0才~3才まで, 大日本図書, 1983.
- 津守真, 磯部景子 : 乳幼児精神発達診断法 3才~7才まで, 大日本図書, 1983.
- 菅野敦, 上林宏文 : T市幼児ことばの教室における早期教育I - 指導の概要と対象児の実態 -, 日本保育学会第39回大会論文集, 589-599, 1986.
- 上林宏文, 菅野敦 : T市幼児ことばの教室における早期教育II - インテーク時の発達プロフィールと指導経過 -, 日本保育学会第39回大会論文集, 600-601, 1986.